

連載特集

あの時代の部活動

《ラグビー部》

全国高校ラグビーで連続優勝、県高校駅伝で区間賞

大塚 廉造

(昭和32年工業化学科卒)

(令和元年8月1日発行「あらや衆報・第133号」より)

まもなく「ラグビーワールドカップ2019」日本大会が開催されます。新屋はサッチュウ先生(第5話)の影響もあり、ラグーマンが多い。その中からラグビーだけでなく駅伝でも活躍した選手を紹介したい。

大塚廉造は、下表町の太塚四郎・フツエ夫妻の長男として、昭和14年1月30日に誕生した。活発で走り回り、勉強嫌いで遊山が大好きな子であった。昭和26年、日新中に入ると自宅によく来ていた貝田先生(理科教諭)を慕って科学研究部に入り、科学の楽しさにハマって、同29年秋田工高の工業化学科に進んだ。

その頃の秋工ラグビー部は「戦後第2の黄金時代」と言われ、憧れていた大塚はクラスで真っ先にラグビー部に入った。子供の頃から、走力には自信があった。

しかし、常に全国制覇を義務づけられているような秋工ラグビー部の練習は厳しかった。特に1年生夏合宿は、終盤になるとバテ過ぎてお粥も喉を通らなくなり、塩を舐め、水を飲み走り続けた。そして体力の限界を乗り越えた時、思いがけない好プレーができることも経験した。この夏合宿をクリアして一回り強くなるが、冬の柔軟体操や腹筋等の体力作りは涙が出るほどきつい。そんな厳しい練習を仲間と競い合い、共に耐え、我慢し、励ましあって乗り越えた。信頼関係は厳しいほど強まった。

「試合では自分の体を殺してボールを生かし、率先して犠牲になり、互いに気を奮い立たせ闘志を込めて協力し合う」という秋工伝統の強いチームワークづくりを練習で徹底的に叩き込まれた。

秋工ラグビー部の最終目標は「正月の全国大会での優勝」であるが、1年生の時は決勝で慶応に5-6で惜敗。国体決勝では天王寺を下して優勝。2年生の時は決勝で保善を零封して8回目の全国優勝を遂げ「超高校級」と言われた。

3年生でスクラムハーフに定着。大いに張り切った。この年はチーム結成時から「弱い」と心配されていたが、年間32回の公式戦は無敗だった。[国体では秋工23-5慶応で優勝。正月の全国大会決勝は秋工14-3盛岡工で9回目の優勝を飾った。準々決勝の保善戦は「実質上の決勝戦」と言われ、両校

ともに低いスクラムに鋭いタックル、気迫に満ちた前に出でのディフェンスで譲らず、緊迫した試合になった。前半早々に先制トライを許し苦しんだが、後半PG成功で追いつき、3-3で辛うじて抽選勝ちだった。大塚は「一番思い出に残る試合だった」と語っている。昭和31~40年の10年間の優勝は、秋工が5回、保善が4回で正に「秋工・保善時代」であった。

3年生の秋、陸上競技部に頼まれて全国高校駅伝秋田県予選に出場することになった。全国高校ラグビー選手権が目前に迫っていたことからサッチュウ先生から「あまり頑張るなよ」と言われていたが、真面目な性格はそれを許さず、5区3kmを全力で走った。

結果は9分38秒で区間最高記録だった。専門外の競技でも区間賞を取るほどのスピードとスタミナを身につけていたのだ。

卒業が近づき、「進学か就職か迷っていたが、東京電力から「弊社は勉学を奨励していて、多くの新入社員が大学に通っている」と言われ決断した。入社後は日大理工学部2部電気科に入学。秋工先輩の東京オリンピック体操金メダリストの遠藤幸雄が助手として来られ、体育の時間「大塚君準備運動をやってくれ、ラグビーのでいいんだよ」と指示。クラスで一躍有名にもらった楽しい思い出もある。

東電では27歳まで現役選手を続けたが、その後は東電学園高等部ラグビー部のコーチ等を務めた。60歳で退職し、会社から勧められた東電不動産(株)と、自ら経営するテンシャル(株)を、68歳まで8年間「2足の草鞋」を履いて掛け持ち勤務を続けた。

12年ほど前から、オフィス、工場、福祉施設、社員寮等の給食受託運営のテンシャル(株)社長に就任し、従業員130名の生活を守って現在に至る。

「新屋郷土会」にも貢献。現会長を務めている。

弟・洋夫も秋工ラグビー部で東北電力入社。「全国電力会社ラグビー大会」で対戦したこともある。弟の分も合わせて6年間も毎日泥だらけのジャージーを洗濯してくれた亡き母には今でも感謝している。毎年のように弟妹一家を温泉旅行に招待する優しい長兄でもある。(のぼこやま)



◎ 資料提供：大塚廉造

◎ 出典：あらや衆報・第133号 令和元年8月1日発行